

サムアーニーとメルヴの村々 —— 12世紀の一アーリムによる村落訪問とその目的 ——

西 村 淳 一

はじめに

ホラーサーン地方の都市メルヴ¹⁾出身のアーリム、サムアーニー (Abū Sa'd 'Abd al-Karīm b. Muḥammad b. Maṣṣūr al-Tamīmī al-Sam'ānī al-Marwazī, h. 562年 (1166年) 没)²⁾ によって著された *Kitāb al-Ansāb* (本稿では Ansāb と略記)³⁾ は、本来ウラマーが持つニスバ⁴⁾の派生源を説明した人名辞典であるが、その派生源に地名が多く含まれていることから地名辞典的な性格を持ち合わせていることで知られている⁵⁾。とりわけ著者の故郷メルヴに関連する地名、とくに都市メルヴ周辺の小都市、村落の名前に関しては記述が多く、それらにちなむニスバが169個も収録されている —— この169個のうち都市 (balda) にちなむものは2つのみであり、残り167個は全て村落 (qarya) にちなむものなので、以降この169個に言及する場合は「メルヴの村名ニスバ」とのみ記す ——。メルヴの地域的広がり —— 本稿ではこれを便宜的に「メルヴ都市圏」と呼ぼう —— を知る貴重な手がかりであるこれらの記述は、ジュコーフスキー (Zhukovskii, V. A.)⁶⁾ をはじめとし

-
- 1) この都市の名は、アラビア語ではマルウ、ペルシア語ではマルヴとカナ転写される。しかし本稿では通例に従い、全てメルヴと表記した。
 - 2) シャーフィイー派の法学者にして系譜学者。また *Dhayl Ta'riḥ Baghdad* や *Ta'riḥ Marw* といった地方史文献の著者でもある。彼の経歴や著作等については Brockelmann 1937, S-I: 565; Muwaffaq 1996; Nāḥi Sālim 1975; Sellheim 1995; al-Zirikli 1996, 4: 55等を参照せよ。また多くのウラマーを輩出したサムアーニー家については Halm 1974: 85-88を参照のこと。
 - 3) Ansābには今のところ4種類の刊本があるが、本稿ではバールーディー (al-Bārūdī, 'Abd Allāh 'Umar) 編のペイルート版とマルゴリウス (Margoliouth, D. S.) 編のライデン-ロンドン版 (大英博物館所蔵写本ファクシミリ版。本稿では Ansāb (M) と略記) を利用する。
 - 4) アラビア語文法で言うところの「関係の名詞 (al-asmā' al-mansūba)」 [ライト 1987, 1: 220] が人物に用いられ、その結びつきの強さのために事実上その人物の名前の一部となったものがいわゆるニスバ (nisba) である。派生源である単語に語尾 -ī —— より厳密には -iyyun だが本稿では略記 —— を付することによって形成され、それを持つ人物が起源、血統、出自、派閥、職業などに関して派生源の語の意味するものに所属または関連していることを表す。
 - 5) Ansābの地名辞典的性格については西村 2005を参照せよ。
 - 6) Zhukovskii 1894はメルヴの歴史地理研究の古典的名著であるが、残念ながら入手も参照も極めて困難である。筆者は一度だけこの書に目を通したが精読することはできなかった。

て研究者らによりたびたび集成、紹介されている [al-Ḥadīthī 1990: 346–376; Kamaliddinov 1993: 28–42; Volin 1939; Zhukovskii 1894]⁷⁾。

ところで、これらメルヴの村名ニスバの説明記事には、著者サムアーニー自身の移動の記録が付記されている場合がある。その一例として、Ansāb の記述形式の紹介も兼ねて、バシュバキー (al-Bashbaqī) というニスバの説明記事を以下に引用してみよう [Ansāb 1: 356–357; Ansāb (M): f. 82 a]。

バシュバキー (al-Bashbaqī) : 2つの bā' [の文字] の間の、点を打たれた無母音の shin [の文字]、および最後の qāf [の文字] で [表される]⁸⁾。このニスバはバシュバ (Bashba) にちなむ。それはメルヴの村々の1つで、[都市]メルヴから5ファルサフ (= 30 km) のところに位置する⁹⁾。その出身者にはアブー・アルハサン・アリー・ブン・ムハンマド・ブン・アルアッパース・ブン・アフマド・ブン・アルハサン・ブン・アリー・アルバシュバキー (Abū al-Ḥasan 'Alī b. Muḥammad b. al-'Abbās b. Aḥmad b. al-Ḥasan b. 'Alī al-Bashbaqī)¹⁰⁾ がいる。彼は敬虔 (sāliḥ) で禁欲的 (zāhid) なシャイフであり、呪文 (al-ruqan) や護符 (al-ta'āwidh) を書いていた¹¹⁾。彼はアブー・アブド・アッラーフ・ムハンマド・ブン・アルファドル・ブン・ジャーファル・アルハラキー (Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. al-Faḍl b. Ja'far al-Kharaqī)¹²⁾、アブー・アルファドル・ムハンマド・ブン・アフマド・ブン・アビー・アルハサン・アルアーリフ (Abū al-Faḍl Muḥammad b. Aḥmad b. Abī al-Ḥasan al-'Ārif)¹³⁾、アブー・ムハンマド・カームカール・ブン・アブド・アッラザーク・アルアディーブ (Abū Muḥammad Kāmkār b. 'Abd al-Razzāq al-Adīb)¹⁴⁾ などから [ハディースを] 聞いた。私 (サムアーニー) は [メルヴの] カムサーン (Kamsān) 村において彼のもとでハンナード・ブン・アッサリー (Hannād b. al-Sarī)¹⁵⁾

7) なお Meftāḥ 1992: 100–128; Ranjbar 1343 Kh.: 238–247 では、Ansāb でなく主に Mu'jam に依拠しつつ、メルヴの村々の名を列挙している。

8) 「2つの～」で始まるこの一文は、このニスバの綴りと読み方について説明している。なお本稿の引用文中における〔〕内の表現は筆者による補足、() 内の語は筆者による言い換えあるいは原文中の表現を示す。同じく引用文中のコロン (:) や下線は筆者によって便宜的に付されたものである。

9) この文章から明らかなように、メルヴは都市そのものの名前であると同時に都市周辺の村落を含む《都市圏》(と呼ぶうる地域的広がり) の名前でもある。

10) 彼については Muntakhab 2: 1254–1255; Taḥbir 1: 583–584 にも伝記記事が収録されている。それによれば彼の没年は h. 543 年シャッワール月 22 日 (1149 年 3 月 5 日) である。

11) Muntakhab 2: 1255; Taḥbir 1: 583 ではこの文章の後に「村々の人々は彼を信じていた (ya'taqidu fī-hi al-nās min ahl al-qurā)」と記されている (Taḥbir では ahl は省略されている)。村々におけるウラマーの役割を考えさせられる内容である。

12) 彼についての詳細は不明。

13) 彼についての詳細は不明。

14) 彼についての詳細は不明。

15) h. 243 年 (857 年) 没。彼については Brockelmann 1937, S-I: 258 を参照。

著 *Kitāb al-Zuhd* を読んだ。またバシュバク^(ママ)村において〔同じく〕彼のもとで諸ハディース (ahādīth) を読んだ。彼は h. 544 年ムハッラム月 (1149 年 5-6 月) に彼の村 (バシュバ村) で亡くなった¹⁶⁾。〔亡くなったとき彼は〕100 歳を越えていた。

このようにこの記事にはニスバの説明とともにそのニスバを持つアーリーなるアーリムの伝記記事が収録されており、サムアーニー自らメルヴ都市圏のカムサーン村およびバシュバ村を訪れて彼から本やハディースを教えてもらった旨が記されている。この手の記述は他の村名ニスバの説明記事においても少なからず見うけられる。また Ansāb とは別の彼の著作であり彼の学問の師を対象とした人名録である *al-Muntakhab min Mu'jam al-Shuyūkh* (本稿では Muntakhab と略記) や *al-Taḥbīr fi al-Mu'jam al-Kabīr* (本稿では Taḥbīr と略記)¹⁷⁾ においても、彼が師を訪ねてメルヴの村々を訪れたことが記されている。

このような村落訪問記録は以下の二点において興味深い。

第一に、それが旅における移動ではなく定住地における日常生活での移動を証言しているという点である¹⁸⁾。サムアーニー自身や彼の著作を扱った先行研究では、イラクやシリアやヒジャーズといった、ホラーサーンから遠い諸地方へ遊学したことが注目されている一方、このようなメルヴ都市圏内での移動はほとんど無視されている¹⁹⁾。また一般にイスラーム世界のウラマーの《移動性》に関する研究では、地域間交流の実態、あるいはイスラーム世界の一体性を捉えるべく巡礼や遊学のような広域移動を重視する場合が多く、ある特定の地域、それも都市とその周辺村落から構成されるような小さな地域の内部における移動は十分に検討されていない²⁰⁾。

16) 彼の没年については史料間で違いがみられる。上記註 10 を参照。

17) Muntakhab, Taḥbīr 両史料の性格についてはそれぞれの編者による序文 Muwaffaq 1996; Nāji Salīm 1975 を参照のこと。ちなみに両者とも *Mu'jam al-Shuyūkh* という原本からの抜粋版であり、前者には 1446 名、後者には 1193 名の伝記が収録されている。その大半はハディース学者であるが詩人やセルジューク朝官僚なども含まれている。またシャーフィイー派に限らずハナフィー派の人物も含まれている。

18) 《旅》を意味するアラビア語名詞はリフラ (riḥla), ペルシア語名詞はサファル (safar) である。両者とも一般には多くの日数をかけて行われる長距離移動を示す際に用いられる。サムアーニーも自身の遊学をリフラと表現している一方、メルヴの村々への訪問についてはリフラとは表現していない。

19) 上記註 2 で挙げた先行研究を参照。

20) 先行研究の概要については森山 2007: 83-84 を参照。例えば「近東における中世名士たちの旅行パターン」と題した Petry 1985 や「中世イスラーム世界におけるウラマーの移動性」と題した湯川 1979 はウラマーの地域間移動を扱った研究の典型例である。ホラーサーン地方のウラマーに関しては Bulliet 1970; 森山 2004 が『ニーシャープール史』を手がかりに彼らの移動傾向を分析しているものの、その主眼は地域間移動に向けられており、都市圏内の移動はほとんど扱われていない。一方イブン・フンドック (Ibn Funduq, h. 565 年 (1170 年) 没) の生涯を紹介した森本 2006 は、彼がバイハク地方のシシュタマド村で生まれ、その地方とニーシャープールとの間を繰り返し行き来したことを指摘しており、本稿の比較材料として参考になる。

第二に、それが《都市→村落》方向の移動を証言しているという点である。従来のウラマー研究においては、《村落出身ウラマーがより高度な学術環境を望んで都市へ集まっていく》という《村落→都市》方向の移動は指摘されているものの、《都市→村落》方向の移動は十分に検討されていない²¹⁾。また従来の研究では、ウラマーは概して都市で活動する人々であるというイメージが強く²²⁾、彼らの都市内部での生き方や活動、あるいは活動の場としての宗教施設——モスク、マドラサ、ハーンカー等——の研究が重視されている一方、ウラマーと村々との関係、あるいは村々に住むウラマーの存在は注目されていない²³⁾。サムアーニーに関して、彼が都市メルヴ内のニザーミーヤ・マドラサやアミーディーヤ・マドラサで教授（mudarris）を務めたことは指摘されているものの、彼とメルヴの村々との関係を詳細に検討した研究は管見の限り存在しない²⁴⁾。

そこで本論考では、サムアーニーの諸著作に記された上記のような彼の村落訪問記録を紹

21) 例えば湯川 [1990: 244-246] は、中世イスラーム世界の諸都市をバグダードやカイロのような「大センター」、ニーシャープールやイスファハーンのような「地域のセンター」、メルヴやカズウィーンのような「地方のセンター」に分類した上で、

このように分類できるとすると、例えば、アッバース朝時代ならば、バグダードを頂点とした学問のセンターのピラミッド状の階層分布が想定できる。より上位のセンターほど幅広い底辺から人材を吸収できるわけで、それがさらに多くの人を引き付けるということになる。ウラマーの移動はこのピラミッドの階段に沿って上に登っていくかたちで行われたと述べる。このような図式からは都市から村へと向かうウラマーの姿は見えてこない。

22) 例えば私市 [1986: 53] は

ウラマーの活動拠点は都市である。既に述べたように十二世紀ころより主要なイスラーム都市にはマドラサ等の建設が促進され、またカーディーを初めとする有給の職が増設、制度化されていった。これらはウラマー制度を維持していく上で極めて好都合な状況であり、都市には多数のウラマーが集まるようになった。

と述べる。また湯川 [1992: 262] は前近代のウラマーについて、ウラマーと都市との間の本質的つながりを否定しつつも社会的経済的条件によりウラマーが都市に集中することを指摘し、

もちろん、このことは都市にしかウラマーと呼ばれる人がいなかったということではない。田舎の村や町にも、都市にいる高名な学者と肩を並べるような人は、めったにいないにしても稀にはいたし、モスクやコーラン学校があれば、中・下級のウラマーと呼べるような人が存在したことは確かである。しかし、これらのウラマーは、「ウラマーと都市」という結び付きを崩すほど量的には多くない。

と述べる。加藤 2003 は上記 2 者ほどはっきりとは述べていないが、都市民を構成する重要な要素としてウラマーを採り上げている。しかし森本 2006 を見てもわかるように、12 世紀以前のホラーサーン地方のウラマーに関しては、このようなイメージをそのまま当てはめることは難しい。

23) ウラマー研究全体の傾向については三浦 1995 を参照。なおニーシャープールの名家の活動を分析した Bulliet 1972 は彼らの一部が地主であったという点を指摘しているが [ibid.: 11]、彼らの村々での活動については検討していない。

24) Kamaliddinov 1993 は Ansāb 中に見られる中央アジアの村落情報を網羅的に収集、検討しているが、サムアーニー研究よりも中央アジア歴史地理研究に重きを置いており、サムアーニー自身の行動についての検討は不十分である。

介し、それらに見える村落訪問の理由について検討する。それにより従来のサムアーニー研究およびウラマー研究が見過ごしてきた《メルヴ都市圏（という特定地域）内の移動》と《《都市→村落》方向の移動》に光をあて、それらがもつ意味や重要性を明らかにしたい。なおその過程において付随的に、メルヴにおけるウラマー社会の人間関係の一端が具体的に示されることとなろう²⁵⁾。

I 都市メルヴとその周辺の村々

1 都市メルヴの立地状況および歴史的背景

都市メルヴは現在のトルクメニスタン共和国の東部、ムルガープ川の下流に位置した。西暦1221年にモンゴル軍によって徹底的に破壊され、その広大な遺構のみが現在まで残っている²⁶⁾。同都市の誕生はアケメネス朝期（前550～前330年）に遡るとされる²⁷⁾。いわゆる「シルクロード」上の要地として大いに栄えたようである。アラブ・ムスリム軍がこの地を征服した後はムスリムによる中央アジア征服および支配の拠点とされ、ウマイヤ朝期（661～750年）にはホラーサーン総督がここに駐在した²⁸⁾。同王朝末期にはいわゆる「アッバース家運動（Da'wa al-'Abbāsiya）」がこの地で勃発し、後のアッバース朝（749～1258年）の成立へと導いた。その後、中央アジアにおけるムスリムの支配領域が拡大するにつれ、メルヴは前線基地としての意義を失っていくが、アッバース朝、ターヒル朝（821～91年）、サーマン朝（873～999年）、ガズナ朝（977～1187年）などによる支配の時代を通じてホラーサーン地方の主要都市としての重要性を保ち続けた。11世紀、セルジューク朝（1038～1194年）が勃興すると、メルヴは同王朝の都の1つとなりさらなる繁栄を得た。サムアーニーが生きた12世紀初頭には、スルタン・サンジャル（Sanjar, 位1118～1157年）の都として最盛期を迎えた。しかし1153年、そのサンジャルがトルコ系グズにより捕

25) なおメルヴのウラマーを扱った研究には Rādfar 1372 Kh.; Ranjbar 1343 Kh.: 235-237; 西村 2003 などがある。

26) メルヴ遺跡の考古学調査の概要については Belenitskii et al. 1973: 211-219; Herrmann 1999 を参照。なお近年、ロシア、トルクメニスタン、イギリスの研究者らによって遺跡調査が進められている。Williams 2007 はその成果の一つであり、同著者による研究書 *Marv al-Shāhijān: The Medieval City of Sultan Kala, Merv, Turkmenistan. Urban Development from the 7th to the 13th Century* も近日中に出版される予定とのことである。

27) アラブ征服以前のメルヴについてはさしあたってマッソン 1970: 139-169 を参照のこと。

28) ウマイヤ朝期には数万にのぼるアラブが同都市へと移住した。彼らは都市内だけでなく都市周辺の村々にも居住したようである。おそらくこのことが、後世のメルヴ都市圏において村々がウラマー人材供給地として機能したことの要因と推測される。サムアーニー一家もアラブの出自であることを自称している。彼ら移住アラブの状況に関しては Shaban 1970: 32-34 を参照。なおアラブ征服以降のメルヴ史の概略については Yakubovskii & Bosworth 1991; Faridani 1992 b; Faridani & Vali 1992; Homāyūn 1992; 佐藤 1994; Kennedy 1999; Vali 1992 等を参照のこと。

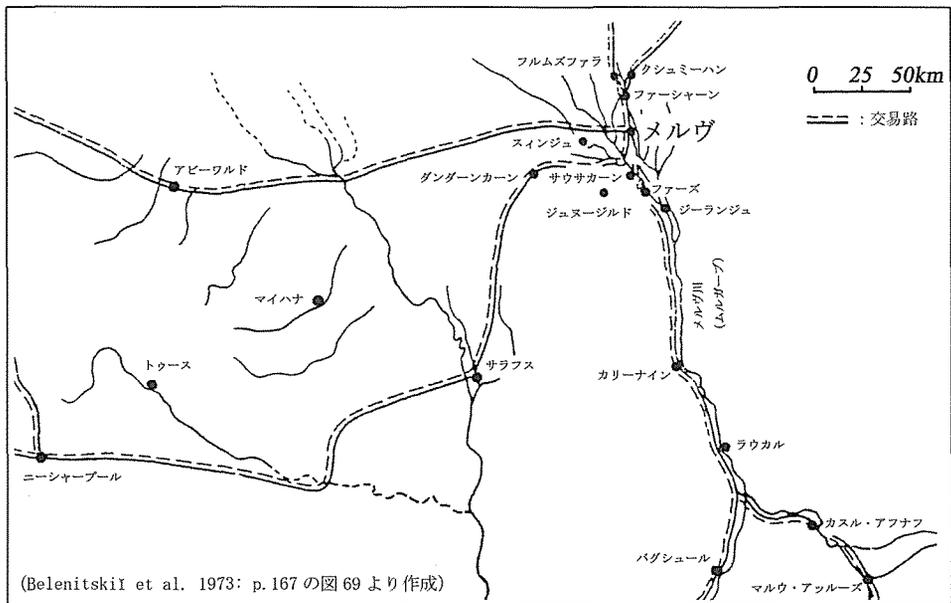


図1 メルヴとその周辺

らえられた後は徐々に衰退の道を歩んでいった²⁹⁾。

2 都市メルヴ周辺の村々について

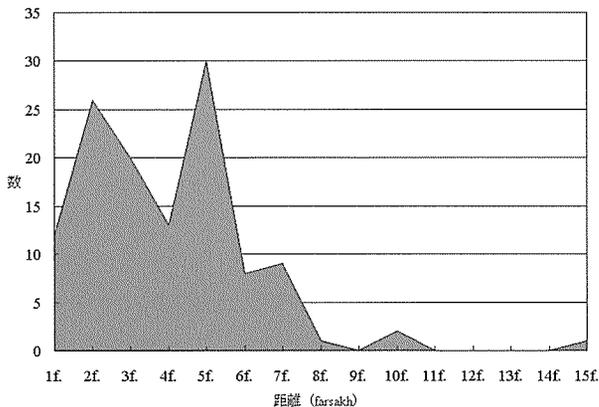
イスラーム期のこの都市の様子については、イスタフリー (al-Iṣṭakhri, 生没年不詳 (10世紀)) に代表される10世紀の地理学者たちがヴィヴィッドな記述を書き残している [Ḥudūd: 94; Masālik: 258-263; Mu'jam 5: 132-136; Šūra: 434-437; Taqāsīm: 298-299, 310-312]。それらについては研究者らが十分に引用、検討しているのでここでは触れるまい³⁰⁾。本稿の対象である都市周辺の村々については、地理学者たちの著作にはほとんど情報を見いだせないが、サムアーニーの Ansāb とヤークート (Yāqūt al-Ḥamawī, h. 626年 (1228年) 没) の地名辞典 *Mu'jam al-Buldān* (本稿では *Mu'jam* と略記) に比較的多くの記述が見うけられる。先に述べたとおり Ansāb にはメルヴの村名ニスバが169個収録されており、その Ansāb のデータを引用しつつさらに独自のデータを付け加えているのが *Mu'jam* である。両史料合わせると計195の小都市、村落名が記されており、同名の村などを考慮すると最低でも202の小都市、村落の存在が確認される。このうち Ansāb 中で都市

29) グズのサンジャル拉致については Bosworth 1968: 152-157; Köymen 1991: 399-466 を参照。

30) 詳しくは Meftāḥ 1992: 87-100; al-Ḥadithi 1990: 331-339; Le Strange 1930: 397-403 を参照のこと。なお Barthold (Soucek (tr)) 1984: 35-46; Meftāḥ 1992 は都市メルヴだけでなくムルガープ川流域の歴史地理を検討しており、メルヴの村々の状況を知る上で参考になる。

とみなされたものは2つ (al-Dandānqān³¹⁾, Qarinayn), Mu'jam 中では3つ (Qarinayn が村とされ, Fāz³²⁾, Jiranj, al-Dandānqān が都市とされている³³⁾) あり, その他は全て村となっている³⁴⁾ —— 従って以降この202個に言及する場合は「小都市, 村落」とは書かずただ「村落」とのみ記す ——。これらの情報は先行研究によってすでに集成, 紹介されているが, 念のため本稿でも稿末の【表1】で一覧に供している。

なお, 上記202の村落のうち, 筆者の仮定したものも含め122について都市メルヴからの距離データを得ることができる。それをまとめたものが稿末の【表2】であり, またその表の数値をグラフ化したものが【グラフ1】である。このグラフからは, 2つの特徴, すなわち第一に都市メルヴから2ファルサフ(≒12km)および5ファルサフ(≒30km)の位置に村が集中していること, 第二に都市メルヴから8ファルサフ(≒48km)以遠で村の数が激減していること, を読み取れる。第一の点をどのように解釈すべきかは議論の余



グラフ1 都市メルヴからの距離と周辺村落数との関係

地を残すところであるが, 第二の点から判断して8ファルサフ付近がメルヴ都市圏の境域であったことはほぼ間違いあるまい³⁵⁾。ただしメルヴ都市圏は都市メルヴから街道に沿って放射線状に広がる地域であったから, 南の方向ではマルウ・アールズ街道に沿って15ファルサフ(≒90km)付近まで伸び³⁶⁾, 西南

31) ただし Muntakhab と Taḥbīr においては, al-Dandānqān は村とされている [Muntakhab 3 : 1324; Taḥbīr 2 : 29, 139]。

32) この Fāz という地名はおそらく Bāz と同じ場所を指し示すが, 後者は Mu'jam において村とされている [Mu'jam 1 : 382]。

33) なおヤークートは Sinj を村と定義しつつ, 「それは大きな町になった (ṣārat madīnat al-ʿaẓīmatan)」と記述している [Mu'jam 3 : 299]。

34) ちなみに10世紀のアラビア語地理書にはメルヴ都市圏の地名が10数個記されているが, その多くは都市とみなされている。しかしそれらの大半は Ansāb や Mu'jam においては村とされている。この違いの理由は不明である。

35) ちなみに10～11世紀のニーシャープールについて検討した清水 [1990 : 27] は, その都市圏を「都市」ニーシャープールよりおよそ一日行程の範囲」と指摘している。

36) 都市メルヴから15ファルサフ(≒90km)の位置にあったカリーナイン (Qarinayn) はメルヴの村というよりはマルウ・アールズ街道の宿場町的な存在であったろう。それゆえ10ファルサフ(≒60km)の位置にあったジーランジュ (Jiranj) がメルヴ都市圏の南端と言えるかもしれない。

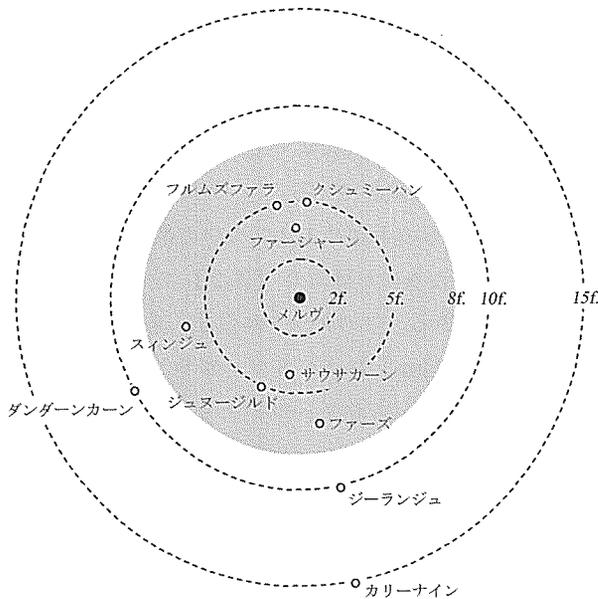


図2 メルヴ都市圏の距離概念図

西の方向ではニーシャープール街道に沿って10ファルサフ(≒60km)付近まで伸び、その他の方向、特に北側では砂地(raml)や荒無地(barriya)に阻まれ5ファルサフ(≒30km)付近までに限られていた。このような状況を概念図で表すと【図2】のようになる。本稿の舞台であるメルヴの村々はこのような地域空間を構成していたのである³⁷⁾。

3 メルヴのウラマー社会

本稿冒頭で述べたように、サムアーニーの Ansāb は本来ウラマーの持つニスバの派生源について説明した人名辞典である。したがってそこに記録された地名は基本的にウラマーの出身地であり、上に示したようなメルヴの村々も農村というよりはむしろウラマーの人材供給地であった。このような村々から構成された上記メルヴ都市圏は、当地のウラマー社会の空間的広がりやを反映した地域像だとみなすこともできよう³⁸⁾。

ところでニーシャープールにおける『ニーシャープール史』と同様に、メルヴにおいても『メルヴ史 (Ta'rikh Marw)』あるいは『メルヴの人々の歴史 (Ta'rikh al-Marāwiza)』などと呼ばれる所謂「地方史文献」が数種類執筆されたことが知られている³⁹⁾。現在ではその

37) ただし表1に収録された村々のうち Bālaqān, Barwanjird, Buznān, Khālidabādh, Zarazm, Zumluq, Shīrnakhshīr, Gharq, Firyānān, Kushmihan, Kanjukān, Mihrabandaqshā'i, Nāranābādh, Wāhkān といった村々はサムアーニーの時代には荒廃していたという。

38) バルトリド (Bartol'd, V. V.) は Bartol'd 1966: 174 においてメルヴ都市圏のことを「文化地域 (kul'turnaia polosā)」と記しているが、都市メルヴだけでなく都市周辺村落からもウラマーが輩出している状況を考えれば、まさにぴったりの表現だと言える。なお同論文では Ālin, Siqadhanj, Mākhuwān といった村々の位置が比定されており参考になる。

39) 筆者は日本オリエント学会第50回大会(2008年11月2日、筑波大学)において「『メルヴ史』解題——12世紀以前のものを中心に——」と題した発表を行い、同文献が11種類(準『メルヴ史』を含めれば13種類)存在した可能性があることを明らかにした。この内容についてはいずれ別稿にて詳しく論じる予定である。なおサムアーニーも『メルヴ史』著者の一人である。

全てが散逸してしまっているが、諸本に残された逸文から判断する限り、それらの多くは他の地方史文献と同様に、伝記記事を多く含んでいたものと想像される。その逸文の中に次のようなものがある [Ansāb 3 : 175; Ansāb (M) : f. 280 b]。

ズワ・アルカンジー (al-Zuwa-al-qanji) : ~中略~ このニスバはズワ・アルカンジュ (Zuwa-al-Qanj) にちなむ。それはメルヴの村々の1つであるシンジュ村にある有名な地区である (hiya maḥalla ma'rūfa bi-qarya al-Sinj min qurā Marw)。~中略~ その出身者には、アフマド・ブン・ウマル・アズワ・アルカンジー (Aḥmad b. 'Umar al-Zuwa-al-qanji)⁴⁰⁾ がいる。アブー・ズルア・アッシンジー (Abū Zur'a al-Sinji)⁴¹⁾ は彼の [著書] メルヴのための『歴史』の中で (fi Ta'riḫ-hi li-Marw) 以下のように言っている。「アフマド・ブン・ウマルはシンジュ村の出身であり、ズワ・アルカンジュに住んだ。」

この記述からは、シンジュ村出身で同村在住のアフマドなるアーリムの伝記記事がアブー・ズルア・アッシンジーの『メルヴ史』に掲載されていたことがわかる。つまり『メルヴ史』の掲載対象となるウラマーには、都市メルヴのウラマーだけでなく、このような村々のウラマーも含まれていたということになる。

そもそも『メルヴの人々の歴史』という書名に見られる「メルヴの人 (マルワズィー)」という概念は、都市メルヴ出身者に限られずメルヴ都市圏内の村落出身者ないし村落在住者をも含むものである。例えば Ansāb に次のような記述がある [Ansāb 5 : 569; Ansāb (M) : f. 578 a]。

ワーフカーニー (al-Wāḥkānī) : このニスバはワーフカーン (Wāḥkān) 村 [の名] にちなむ。私 (サムアーニー) はそれ (ワーフカーン村) がメルヴ [都市圏] の村々に含まれると考える。というのも、このニスバをもつ人物 (al-muntasib bi-hādhihi al-nisba) がメルヴの人 (Marwazi) だからである。私はこの村の名前を聞いたことがなかったが、おそらくこの村は廃墟になったか別の名前になったのであろう。[このニスバをもつ] 彼は、アムル・ブン・ハフス・アルワーフカーニー ('Amr b. Ḥafṣ al-Wāḥqānī)⁴²⁾ である。

この記述によれば、著者サムアーニー自身はワーフカーンという村の名前を知らなかったが、この村名ニスバをもつアーリム (ここではアムル) が「メルヴの人」だったので、この村をメルヴの村と判断したのだという。サムアーニーが下したこの判断は《ある村落の出身者は、村落出身であるがゆえにその村名ニスバを持つ一方、その村を含む地域の出身でもあるがゆえにその地域名ニスバをも持ちうる》という地名ニスバの特質を理由としているに違いない。

40) 彼の没年等の詳細は不明である。

41) サムアーニーは Ansāb において彼の『メルヴ史』から多くの記述を引用しているものの、彼自身の情報について全く記していない。他の人名録にも彼の伝記は見あたらず、彼の経歴等はいっさい不明である。

42) 彼の没年等の詳細は不明である。

いずれにせよ多寡はさておき「メルヴの人々」の一部は明らかに村落出身者/在住者だったのである⁴³⁾。メルヴのウラマー社会は、都市メルヴ出身者ばかりでなく、このような村落出身者/在住者によっても構成されていたのである。

II サムアーニーによる村落訪問

上記のように村々の存在感が強いメルヴ都市圏のウラマー社会では、都市圏内の《都市⇔村落》間移動および《村落⇔村落》間移動が活発に行われていたと考えられる。とくに従来のウラマー研究で指摘されている《村落出身ウラマーがより高度な学術環境を望んで都市へ集まっていく》という《村落→都市》方向の移動は、これだけの村々を抱える地域だけに相当多かったに違いない⁴⁴⁾。しかしながら本稿では冒頭で述べたような理由から、サムアーニー自身の《都市→村落》方向の移動に注目してみたい。

サムアーニーは、Ansāb, Muntakhab, Taḥbīr の記述から知られる限りで、実に26のメルヴ周辺の村々に直接訪れている⁴⁵⁾。稿末の【表1】中、地名の後ろに*印の付されているものが彼の訪れた場所である⁴⁶⁾。以下ではそれらの村落訪問記録を具体的に引用しつつ訪問の理由について考えてみよう。

1 学問（特にハディース伝承）のために

彼の村落訪問において最も多く見られる訪問理由は、村々にいたウラマーに学問、特にハディース学の教えを乞うというものであった⁴⁷⁾。本稿「はじめに」で引用したバシュバ

43) ちなみに Muntakhab, Taḥbīr 両史料には、「メルヴの人 (min ahl Marw)」と分類された人物が82名、「メルヴの○○村の人 (min ahl qarya ○○ ihdā qurā Marw (○○は地名))」と分類された人物が43名確認される。前者82名のうち21名、後者43名のうち6名が名前にマルワズィー・ニスバを持っている。

44) 実際、Ansāb, Muntakhab, Taḥbīr に収録されたウラマーの伝記を見ていると、多くの村落出身ウラマーが少なくとも一度は都市メルヴを訪れていたことがわかる。また都市メルヴに移住した村落出身ウラマーの例 [Muntakhab 2 : 1171; 3 : 1796; Taḥbīr 2 : 348] や、「都市メルヴをしばしば訪れた」と説明されている村落在住ウラマーの例 [Ansāb 1 : 402; Ansāb (M) : f. 92 a; Muntakhab 2 : 1054; Taḥbīr 1 : 439] も見うけられる。

45) おそらくサムアーニーはこの26村以外の村々にも行ったであろう。Muntakhab 1 : 479; 2 : 694 の記述によれば彼がアルザンカーバーズ (Arzanqābādh) 村とフスラーバーズ (Khusrābādh) 村にも行ったように判断できるが、Ansāb に両村の説明がなく裏付けが得られないので本稿では訪問先に含めなかった。

46) ちなみにヤークートも Junūjird, Jiranj, al-Dandānqān, Sawsaqān, Fāshān, Hurmuzfarah といった村々に自ら訪れている。

47) 少なくとも11村 (Bakhjarmān, Bashba, Būzanshāh, Jūbār, Jiranj, Kharaq, Sinj, Fundīn, Kushmīhan, Kamsān, Naws) において彼は勉学活動を行っている。

キー・ニスバの説明記事にそれが典型的に示されているが、その他にも以下のような記録がある [Ansāb 1 : 294; Ansāb (M) : f. 68 a]。

バフジャルマーニー (al-Bakhjarmānī) : ~中略~ このニスバはメルヴの村々のうちの1つでアンダラーバ (Andarāba) [村] の近くにあるバフジャルマーンと呼ばれる村 [の名] にちなむ。~中略~ 私 (サムアーニー) はこの村でハイサム・ブン・クライブ (al-Haytham b. Kulayb)⁴⁸⁾ のハディースの一部をムハンマド・ブン・ムハンマド・アッサラワーティー (Muḥammad b. Muḥammad al-Ṣalawātī)⁴⁹⁾ から直々に聞いた。彼 (ムハンマド) はそれをハリリー (al-Khalīlī)⁵⁰⁾ から伝承し、ハリリーはフザイー (al-Khuzā'i)⁵¹⁾ から、フザイーはハイサム [本人] から伝承したのであった。

このような理由による村々への訪問は、ウラマーの伝統的な勉学活動の一環であった⁵²⁾。セ

48) 彼は *al-Musnad al-Kabīr* の著者アブー・サイード・アルハイサム・ブン・クライブ・ブン・シュライフ・ブン・マーキル・アッシャーシー (Abū Sa'īd al-Haytham b. Kulayb b. Shurayḥ b. Ma'qil al-Shāshī, h. 335 年 (946 年) 没) である [al-Zirikli 1996, 8 : 105]。

49) 彼はムハンマド・ブン・ムハンマド・ブン・アブド・アルハミード・ブン・アビー・アルカーシム・ブン・イブラーヒーム・ブン・アルハイサム・アッサラワーティー・アルバルヒー (Muḥammad b. Muḥammad b. 'Abd al-Ḥamīd b. Abī al-Qāsim b. Ibrāhīm b. al-Haytham al-Ṣalawātī al-Balkhī, 没年未詳) である [Ansāb 3 : 552; Ansāb (M) : f. 354 b]。

50) 彼はアブー・アルカーシム・アフマド・ブン・ムハンマド・ブン・ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフ・アルハリリー・アッディフカーン・アズィヤーディー (Abū al-Qāsim Aḥmad b. Muḥammad b. Muḥammad b. 'Abd Allāh al-Khalīlī al-Dihqān al-Ziyādī, h. 492 年 (1098-9 年) 没) である [Ansāb 2 : 394; Ansāb (M) : f. 206 a; Siyar 19 : 73-74]。

51) 彼はアブー・アルカーシム・アリー・ブン・アフマド・ブン・ムハンマド・ブン・アルハサン ~以下ナサブ略~ アルフザイー (Abū al-Qāsim 'Alī b. Aḥmad b. Muḥammad b. al-Ḥasan ... al-Khuzā'i, h. 411 年 (1020 年) 没) である [Ansāb 5 : 246; Ansāb (M) : f. 519 a; Siyar 17 : 199-200]。

52) 例えば Ansāb 5 : 75; Ansāb (M) : f. 484 a には

アブー・ムハンマド・ヒッバーン・ブン・ムーサー・ブン・サワード・アルクシュミーハニー・アッスラミー (Abū Muḥammad Ḥibbān b. Mūsā b. Sawād al-Kushmīhanī al-Sulamī)。彼は信頼の置ける正直な人物であり、イブン・ムバラクの著書の伝承者であった。人々は彼を目指して旅し、彼の村 [クシュミーハン] で彼から [直に本の内容を] 聞いた。~中略~ 彼は h. 231 ~ 233 年 (845-6 ~ 847-8 年) ごろに亡くなった。

とあり、メルヴにおいて古くから勉学目的で村々を訪れるウラマーが多かったことを示唆している。また以下に引用するアブー・アブド・アッラーフ・アルファドル・ブン・ムーサー・アッシーナーニー (Abū 'Abd Allāh al-Faḍl b. Mūsā al-Sinānī, h. 191 or 192 年 (806-7 or 807-8 年) 没) にまつわる逸話もまた、古い時代におけるウラマーの勉学目的の村落訪問を示す一例である [Ansāb 3 : 365; Ansāb (M) : f. 323 b]。

彼 (ファドル) の墓はシンジュ (Sinj) から近いラーマージャーフ (Rāmāshāh) という村にあるのだが、[その村に彼の墓があった理由は] 人々が彼に着せた無実の罪によって彼がシーナーン村を出てその村 (ラーマージャーフ) に住んでいたからである。これは次のような事情によるものであった。

シーナーン村は彼のもとへ知識を求めてやってきたよそ者たち (pl. al-ghurabā') や放浪者たち⁵³⁾のせいで疲弊していた (dāqat)。そこで人々は [一計を案じ] ある女性との密会⁵⁴⁾

ルジューク朝期以降、都市メルヴにはマドラサが建てられたが、ハディース学のような口承を重んずる学問においては師を求めて遊学するような勉学活動が依然根強く行われていたのであり、サムアーニーもそれに倣ったのである。

ちなみにサムアーニーは、このように自ら村へ出向き学問を教わる一方で、村に住む優れたアーリムを都市メルヴへ招聘するというも行っている。以下の記述からその様子が伺える [Ansāb 3 : 466 ; Ansāb (M) : f. 340 a]。

シャッワリー (al-Shawwālī) : このニスバはシャッワール (Shawwāl) にちなむ。それはメルヴの村々の1つであり、[都市]メルヴから3ファルサフ (= 18 km) のところに位置する。とてもすばらしい村である。そこには我々 [サムアーニー家] の私領地 (ḡay'a) がある。～中略～ その出身者にはアブー・ターヒル・ムハンマド・ブン・アビー・アンナジュム・ブン・ムハンマド・アッシャッワリー・アルハティーブ (Abū Ṭāhir Muḥammad b. Abī al-Najm b. Muḥammad al-Shawwālī al-Khaṭīb)⁵³⁾ がいる。～中略～ 彼はときどき [メルヴの] 町 (balad) へやって来ていた。我々が彼に [彼のもとで] ブハーリー⁵⁴⁾ の *al-Jāmi' al-Ṣaḥīḥ* を読むため町へ来てくれるよう求めたので、彼はそれに応えてくれたのであった。我々は [都市メルヴ内の] バルムウィー⁵⁵⁾・ハーンカーにおいて彼のもとで [ブハーリーの *al-Ṣaḥīḥ*] を読んだ。⁵⁶⁾

(al-ijtimā' bi-mra'a) を彼に関係付け [彼を貶めようと計つ] た。人々はあらかじめその女性に物を与え、彼女に虚偽を告白させたのである。ゆえにファドルは彼らの村からラーマールシャーフ村へと移った。ところがその後スィーナーン村の耕地が旱魃にあり、収穫が減少した。人々は困惑し、ついに彼に戻るよう懇願した。そこで彼は言った。「私はあなた方が私に嘘をついたことを知らせるまで戻らない。あなた方が言ったようなことは身に覚えがない。」それゆえ人々はこのことを白状したが、彼は彼らに知らせて言った。「私は嘘つきで罪深い住民のいる村には住まない。」

(※ Ansāb では mārīn とあるが、Ansāb (M) では baladiyyin (町の者たち) とある。)

この逸話からは、高名なアーリムを慕って村を訪れる「よそ者」ウラマーの存在を確認できる。積極的に村々へと赴いたこのようなウラマーは、ときに村の農民から疎ましく思われるほどに数が多かったのである。なおこの逸話には、村に住むアーリムがさらに別の村へと移住する様子も記されており、メルヴ都市圏のウラマーの間で《都市⇔村落》間の移動ばかりでなく、《村落⇔村落》間の移動も行われていたことがわかる。また旱魃による収穫減少を理由にファドルに村への帰還を求めたという点は農民がファドルを聖者とみなしていたことをうかがわせ、農村におけるウラマーの役割を考えさせられる内容だと言える。

53) Ansāb 同箇所によれば、彼は h. 532 年 (1137-8 年) にシャッワール村で没し同村に埋葬された。一方 Muntakhab 3 : 1673-74 ; Taḥbīr 2 : 267-8 によれば、彼は h. 533 年ズー・アルカーダ月 16 日 (1139 年 7 月 15 日) に同村で没した。

54) 著名なブハーリー (Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Ismā'il al-Bukhārī, h. 256 年 (870 年没) のことである [Robson 1960]。

55) アブー・ハフス・ウマル・ブン・ムハンマド・ブン・アリー・ブン・ハイザル・アルバルムウィー (Abū Ḥafṣ 'Umar b. Muḥammad b. 'Alī b. Ḥaydhar al-Barmuwi). h. 535 年 (1141 年) 没。Ansāb 1 : 331 ; Ansāb (M) : f. 76 b を参照。

56) Muntakhab 3 : 1673-74 ; Taḥbīr 2 : 267-8 にもこれと同様の記述があるが、Muntakhab では後半部が次のように記されている。

この記述にはサムアーニー自身がシャッワール村へ行ったことを示す内容は含まれていないが、サムアーニー家の私領地がこの村にあることが示されており、彼がこの村へ行ったことを推測させる根拠となっている。いずれにせよ彼は、このように村々に住むウラマーを都市メルヴへ招聘することにより、あるいは先述のごとく村々に住むウラマーのもとへ自ら赴くことにより、学問を通じた彼を中心とするメルヴ都市圏ウラマー人脈を作り上げていたのである。

2 葬儀参列のために

上記のような学問を通じたウラマーとの交際では、交際相手のウラマーは基本的にサムアーニーの師であった⁵⁷⁾。それゆえそれらのウラマーは大抵サムアーニーより年上であり、当然ながら彼より先に亡くなる場合が多かった。Muntakhab や Taḥbīr に掲載された彼の師の伝記には、多くの場合、没年、没地、埋葬場所などが記されている。

このような師の死に際して、彼は必要かつ可能な場合には葬儀に参列し、死者のための礼拝を行うなどしていたようである⁵⁸⁾。村で亡くなった師に対してもそれは例外ではなく、以下の記述が示すように、そのためだけにわざわざ村へ出向くこともあった [Muntakhab 3 : 1460 - 1461 ; Taḥbīr 2 : 133 - 134]。

アブー・アルファドル・ムハンマド・ブン・スライマーン・ブン・アルハサン・ブン・アムル・ブン・アルハサン・ブン・アビー・アムル・アルフンディーニー・アルマルワズィー (Abū al-Faḍl Muḥammad b. Sulaymān b. al-Ḥasan b. ‘Amr b. al-Ḥasan b. Abi ‘Amr al-Fundīnī al-Marwazī)。フンディーン (Fundīn) 村の人。～中略～ 私はメルヴにおいて、そしてフンディーン村において、彼から [彼の講義を] 書き取った。～中略～ 彼は h. 544 年ムハッラム月 20 日 (1149 年 5 月 30 日) 日曜日の 2 つの礼拝の間 (bayna ṣalātay yawm al-aḥad) にそこ (フンディーン村) で亡くなり、月曜日の午後に埋葬された。私 (サムアーニー) は彼に対する [葬儀の] 礼拝のため、また彼の埋葬のためにフンディーン村へと出ていった。

この記述からは、サムアーニーが亡くなった師に対して弔意を示すために村へ赴いたことが伺える。ここには、単に学問上の理由からだけではない、人間同士の付き合いの中で生まれ

我々 (サムアーニー達) は、彼 (ムハンマド) のもとで *al-Ṣaḥīḥ* を読むために、彼に [メルヴの] 町に滞在してくれるよう求めた。[その求めに応じ] 彼は町に滞在した。[当時のメルヴの] シャイフたちは我々がシャイフ、ウマル・ブン・アビー・アルファドル・アルバルムウィーのハーンカーに集まったものだったが、私は彼 (ムハンマド) のもとで、あるいは他の [集まっていた] シャイフたちのもとで *al-Ṣaḥīḥ* の全てを読んだのであった。

57) 一説によればサムアーニーの師の数は 7000 人にも及ぶと言われ [Najī Salīm 1975 : 20]、彼の著作には膨大な数の師の名前が記載されている。しかしその一方、彼の弟子の名前はほとんどわからない。例えば *Siyar* 20 : 460 には 8 人の名前が見られるのみである。このように、彼の人間関係について史料から明らかになる部分はほぼ師との関係に限られている。

58) 例えば *Ansāb* 4 : 339 ; *Ansāb* (M) : f. 417 b ; *Muntakhab* 3 : 1797 を参照。

る義理や人情によって促された村落訪問の様子を見出すことができるのである。

3 墓参詣のために

上記の葬儀参列記事にも示されているように、村出身のウラマー、あるいは村に住むウラマーは、亡くなるとその村に埋葬されるのが普通であった。仮に何らかの理由で村を離れているときに亡くなってしまった場合でも、以下の引用に見られるように、亡骸は村に戻されて後に埋葬されたようである [Muntakhab 3 : 1866; Taḥbīr 2 : 394]。

アブー・アムル・アルヤサウ・ブン・ムハンマド・ブン・アビー・アルフサイン・ブン・アビー・ウマル・ブン・アリー・ブン・ムハンマド・ブン・アルヤサウ・アッディフカーン・アルファーシャーニー (Abū 'Amr al-Yasa' b. Muḥammad b. Abī al-Ḥusayn b. Abī 'Umar b. 'Alī b. Muḥammad b. al-Yasa' al-Dihqān al-Fāshānī)。ファーシャー村の人。村の長 (muqaddam) であった。～中略～ 彼は h. 549 年ラビーウ・アルアッワル月 (1154 年 5-6 月) に〔メルヴの〕町 (al-balad) で亡くなった。彼〔の遺骸〕は彼の村に運ばれ、そこで埋葬された。

この記述では、ヤサウなる人物が都市メルヴで亡くなったとき彼の亡骸は故郷ファーシャー村に運ばれて埋葬されている。都市メルヴには大きな墓地がいくつか存在したが⁵⁹⁾、彼はそれらに埋葬されることもなく故郷の村に葬られたのであった。この記述同様、以下に引用する記述においても、亡くなったアーリムの亡骸は住んでいた村に戻されて埋葬されている [Muntakhab 3 : 1735-1736]。

アブー・ナスル・アルムザッファル・ブン・アルダシル・ブン・アビー・バクル・ブン・アブド・アッサマド・アルカーティブ・アルマルワズィー (Abū Naṣr al-Muẓaffar b. Ardashīr b. Abī Bakr b. 'Abd al-Ṣamad al-Kātib al-Marwazī)。～中略～ 彼の出生地は〔メルヴの〕町の中 (fi al-balad) であったが、町の上手にあるサディーワル (al-Sadiwar) 村に住んだ。～中略～ 彼は h. 560 年ラビーウ・アルアーヒル月 (1165 年 2-3 月) にクラフトハーン (Kulakhtukhān) 村で亡くなった。そして〔彼の遺骸は〕サディーワル村へと移され、ラビーウ・ブン・アナス・アルバクリー (al-Rabi' b. Anas al-Bakri)⁶⁰⁾ 廟 (mashhad) のそばに埋葬された。私 (サムアーニー) は彼の墓を参詣した。⁶¹⁾

59) ジャッスィーン (Jaṣṣīn) 墓地 [Ansāb 2 : 63-64; Ansāb (M) : f. 130 b; Mu'jam 2 : 164], S-n-j-dhān (読み方不明) 墓地 [Muntakhab 2 : 676; Taḥbīr 1 : 218 他], クシャーンシャーフ (Kushānshāh) 墓地 [Muntakhab 3 : 1545; Taḥbīr 2 : 188], トゥウイク路地 (sikka Tuwayk) 墓地 [Ansāb 1 : 495; Ansāb (M) : f. 113 a] などがあった。Ansāb, Taḥbīr, Muntakhab においては 2 番目の S-n-j-dhān 墓地の埋葬例が多く見うけられる。サムアーニー自身も死後その墓地に埋葬されている [T. Shāfi'iya 7 : 185]。

60) h. 139 年 (756-7 年) 没 [Siyar 6 : 169-170]。

61) この記述は Taḥbīr 2 : 309-310 にも見られるが、そちらでは遺体の移送および埋葬に関する記述が省略されている。

かくして村のウラマーは、たとえ亡くなくても村に埋葬されることで村のウラマーたり続けたのであった⁶²⁾。そしてこの記述に見られるように、死者となった彼らを訪ねること——すなわち墓参詣——もまた、サムアーニーの村落訪問の一目的となっていたのである。

メルヴ都市圏におけるサムアーニーの墓参詣事例は、上に引用したサディーワル村の例を含め、少なくとも7村 (Sasajird, Sadiwar, Sinj, Furāhinān, Firyānān, Kushmihan, Hurmuzfarah) で確認される。そのうちの1つには以下のような記述が見られる [Ansāb 4 : 377; Ansāb (M) : f. 426 b]。

この村 (フィリヤーナーン (Firyānān)) はメルヴのバージュフースト (Bājkhūst) [村] のそばにあり、今は廃墟となっている。しかしアブー・アブド・アッラフマーン (Abū ‘Abd al-Raḥmān)⁶³⁾ の墓がそこに残っていて、人々はそれを参詣しその [墓の] 周囲を廻るのである。私 (サムアーニー) もそれを幾度となく参詣した。

この記述には、埋葬者のもつバラカに頼ろうとして墓の周囲を旋回⁶⁴⁾するメルヴの人々の姿が描写されている。サムアーニーがこの墓に「幾度となく参詣した」のも、おそらくは人々と同じような動機によるものであったろう。

このような目的での村落訪問の背景には、イスラーム世界全体における聖者崇敬や聖墓参詣の流行があったと考えられる⁶⁵⁾。サムアーニーは上記7例以外に、自ら行くことのなかった4村 (Jāwarsa, al-Dandānqān, Zarazm, Fanīn) 中の墓や参詣に関しても記録を残しており、それらはさながらメルヴ都市圏内の参詣地を案内しているようでもある。その4村中の1村であるジャーワルサ村に関して、サムアーニーは以下のように記す [Ansāb 2 : 13; Ansāb (M) : f. 120 a]。

それ (ジャーワルサ村) はメルヴから3ファルサフ (≒ 18 km) の位置にある村である。そこにはアブド・アッラーフ・ブン・ブライダ (‘Abd Allāh b. Burayda)⁶⁶⁾ の墓がある。メルヴとその近郊 (al-nawāḥi) の人々は、バラアア⁶⁷⁾の夜にそのもとへと集まる。

62) ただし村落出身アーリムがメルヴの墓地に埋葬される例も少ないながら存在する。例えば Ansāb 2 : 317; Ansāb (M) : f. 187 b; Muntakhab 2 : 1258 を参照。

63) 彼はアブー・アブド・アッラフマーン・アフマド・ブン・アブド・アッラーフ・ブン・ハキーム (ないしハカム) ・アルアタキー・アルマルワズィー・アルフィリヤーナーニー (Abū ‘Abd al-Raḥmān Aḥmad b. ‘Abd Allāh b. Ḥakīm (or al-Ḥakam) al-‘Atakī al-Marwazī al-Firyānānī, 没年未詳) である [Ansāb 4 : 155, 377-378; Ansāb (M) : f. 426 b]。

64) ここでの墓旋回は明らかにメッカのカーバ神殿での儀式「タワーフ」を模した行為である。このような行為はイスラーム世界各地の聖墓参詣において見うけられる。

65) イスラーム世界における聖墓参詣の歴史については大稔 1999 : 151-160 を参照。

66) 教友ブライダ (h. 60-63年 (680-683年) ごろ没) を父に持つアラブ出自のタービッ (預言者の教友の後継者)。父ブライダとともにメルヴへ移住し h. 115年 (733-4年) に亡くなった。彼については西村 2003 を参照。

67) 「バラアアの夜」はシャバーン月 15 日夜、あるいはその時行われる祭を意味する。詳しくは Brunschvig 1960 を参照。

この記述は、ウラマーを含む12世紀の人々の墓参詣への志向、そしてそれによってメルヴ都市圏内で人々の活発な往来があったことを如実に物語っているのである。

4 私領地訪問のために

ところで、上記第1節で引用したシャッワーリー・ニスバの説明記事の中に記されている通り、サムアーニー家はシャッワール村に私領地 (day'a) を持っていた⁶⁸⁾。残念ながらサムアーニーの著作中には彼自身はその村へ行ったことを示す記述は見つからないが、先述したような彼とこの村のアーリムとの人間関係から考えても、彼がその村を訪れたことは想像に難くない。このシャッワール村を含め、サムアーニー家の私領地はメルヴ都市圏内の4村 (Andāq, Zabūya, Sinj, Shawwāl) に確認される⁶⁹⁾。そしてこの中でシンジュ村に関してのみ、サムアーニーは以下のように自ら訪れたことを明記している [1例目: Muntakhab 2 : 788-789/2 例目: Ansāb 3 : 318; Ansāb (M) : f. 313 a]。

- (1) アブー・アフマド・ザークル・ブン・アビー・バクル・ブン・アフマド・アッシンジー・アルガラビーリー (Abū Aḥmad Dhākir b. Abī Bakr b. Aḥmad al-Sinjī al-Gharābili)。シンジュ村の人。～中略～ 私 (サムアーニー) は [メルヴの] 町 (al-balad) において、そして彼の村シンジュにおいて、彼から [ハディースを] 聞いた。⁷⁰⁾
- (2) アブー・アルアッバース・アフマド・ブン・ムハンマド・ブン・サッラージュ・アッシンジー・アッタッハーン (Abū al-'Abbās Aḥmad b. Muḥammad b. Sarrāj al-Sinjī al-Taḥḥān)。～中略～ 彼は h. 400 年 (1009-10 年) 以降に亡くなった。彼の墓はシンジュ村 B-shākh 地区⁷¹⁾のモスクの端にある。私 (サムアーニー) は何度もそれを参詣した。

特に2例目は、彼が何度もこの村を訪れたことを示唆しており、彼とこの村との結びつきの強さを物語っている。これらの記述によれば彼の訪問理由は学問と墓参詣のためであったが、頻繁に訪れていたとすれば私領地管理も理由の1つだったのではないかと想像される。ちなみに学問や墓参詣以外の目的でこの村を訪れたことも事実あったようであるが、その点については以下第5節で取り上げることにする。

なお、サムアーニーとシンジュ村との結びつきという点に関して付言すれば、以下に引用する記述も興味深い [Ansāb 3 : 317; Ansāb (M) : f. 313 a]。

68) セルジューク朝期の土地所有の諸相についてはラムトン 1976 : 55-79 が詳しい (ただしダイアに関する説明は乏しい)。

69) このうち Zabūya の私領地に関して、サムアーニーは「我々はそれを祖先 (jadd-nā al-a'lā) から相続した」と説明している [Ansāb 3 : 134; Ansāb (M) : f. 270 a]。

70) このザークルなる人物はシンジュ村の集会モスクの世話人であった (kāna yatawallā amr al-masjid al-jāmi' bi-hā)。h. 546 年 (1151 年) 没。彼の記事は Taḥbīr 1 : 275 にも見られるが、そこではサムアーニーがシンジュ村に行ったことを示す記述は省略されている。

71) この地区名の読み方は不明である。

アブー・ダーウード・スライマーン・ブン・マーバド・ブン・カウサジャー・アッスィンジー (Abū Dāwūd Sulaymān b. Ma'bad b. Kawsajān al-Sinji)。～中略～ 彼 (スライマーン) は h. 257 年ズー・アルヒッジャ月 (871 年 10-11 月) にスィンジュ村で亡くなった。私はこの村の人々に彼の墓を新しくすることを命じた。そして [私自身の手で] 焼きレンガに彼の名前と没年を書き記し、それを彼の墓の石板上に置くためにその村へと送った。墓は [その村の] T-z-n⁷²⁾ と呼ばれる地区の荒地の中にある。

この記述からは、サムアーニーがこの村の内部の問題に自ら関与し、それに関して村人たちに指示できる立場にあったことがわかる。もしかするとこの記述は彼の私領地管理の一例なのかもしれないが、いずれにせよ彼とこの村との結びつきの強さを物語る好例と言えよう⁷³⁾。

5 戦争仲裁のために

上記第 1 節から第 4 節に見られるサムアーニーの村落訪問は全て彼の《村へ行きたい》という能動的な動機に基づいたものであった。しかし Ansāb 中のある記述を見ると、場合によっては《村へ行かされた》という受動的な村落訪問事例も存在したことがわかる。それは以下のような記述である [Ansāb 1 : 458; Ansāb (M) : f. 105 b]。

トゥルカーン (Turkān) はメルヴの村である。～中略～ 私 (サムアーニー) がこの村の名を [ここに] 記したのは、私が [別な場所への] 移動の途中に (mujtāzan) そこでハディースを聞いたということをあなた [という読者] に知ってもらうためである。私は、グズ軍 ('askar al-Ghuzz) が戦闘のためファーシャーン砦のそば (taḥt ḥiṣn Fāshān) に駐留していたとき、その村で二泊した。彼ら (グズ) が和睦 [交渉] のため私を連れてきていたのである (kānū qad aḥḍarūnī li-l-muṣālaḥa)。

この記述において、彼がトゥルカーン村でハディースを聞いたというのは副次的な出来事に過ぎない。彼は戦争の仲裁役として半ば強制的にその村へ連れてこられたのであった。

このような戦争仲裁のための村落訪問事例は、上記のもの以外にもう一つ、以下の記述に見うけられる [Ansāb 3 : 317; Ansāb (M) : f. 313 a]。

h. 550 年ラジャブ月 (1155 年 8-9 月)、グズ軍 ('askar al-Ghuzz) がそこ (スィンジュ村) にある砦 (ḥiṣn) を包囲すべく丸 1 ヶ月 [スィンジュ村に] 駐留した。彼らは砦の守備隊 (ahl al-ḥiṣn) と交戦したが、それを征服することは出来なかった。その後も彼らは幾度となく、2 ヶ月、3 ヶ月とそれを包囲し、結局努力の末 (ba'da jahd), h. 555 年ジュマーダー・アルウラー月

72) この地区名の読み方は不明である。

73) ちなみにサムアーニーはスィンジュ村の長だったアブー・ムハンマド・アルハサン・ブン・ムハンマド・ブン・イスマーイール・ブン・シュアイブ・アッスィンジー (Abū Muḥammad al-Ḥasan b. Muḥammad b. Ismā'il b. Shu'ayb al-Sinji, h. 536 年 (1141 年) 没) ととも面識があった [Muntakhab 2 : 661; Taḥbir 1 : 213]。

(1160年5-6月)、砦側と和睦を結んだ。その時の仲裁役 (al-mutawassit) が私 (サムアーニー) であった。

この記述の場合、彼が仲裁役に指名されて強制的に村へ連れてこられたのか、あるいは仲裁役を買って出て自発的に村へやって来たのか、どちらなのかはわからない。ここで登場するスィンジュ村は上記第4節でも指摘したとおり彼との結びつきが非常に強い村であったから、後者であった可能性も十分に考えられる。しかしそもそも戦争自体が起こっていなければこの時の訪問はなかったわけであるから、その意味においてはこの訪問もまた彼にとって受動的な行為だったと言える。

このような戦争仲裁という理由による村落訪問は、サムアーニー自身が望んだか望まなかったかに関わらず、メルヴ都市圏における彼、そしてサムアーニー家の名声や威信を一層高めたに違いない。彼は都市メルヴばかりでなく都市周辺の村々の安全保障問題にまで関わった、まさにメルヴ都市圏の名士だったのである⁷⁴⁾。

おわりに

以上のように本稿では、サムアーニーの諸著作中に見られる彼のメルヴ村落訪問記録について、それらに見られる訪問の理由を ① 学問 (特にハディース伝承) のため、② 葬儀参列のため、③ 墓参詣のため、④ 私領地訪問のため、⑤ 戦争仲裁のため、の5つに分類しつつ、各々の具体的事例を引用して検討を行った。それにより、都市メルヴだけに限らず、様々な理由によりメルヴ周辺の村々をも日常活動の場としたアーリムの姿が詳細に明らかとなった。なお、これら5つの理由の各々は必ずしもメルヴ都市圏での村落訪問に限られたものではなく、しばしば他の地域での村落訪問の理由にもなった⁷⁵⁾。しかし、これら5つの全てが見られるのはメルヴ都市圏での村落訪問の場合のみであり、サムアーニーとメルヴの村々との結びつきがいかに強かったかがここからわかるのである。

最後に、本稿の意義を2つの側面から指摘し、稿を締めくくりにしたい。

74) なお本節で引用した2つの戦争仲裁事例に関しては、年代記や史書などからの裏付けを得ることはできなかった。

75) 彼はたとえメルヴ都市圏以外の地域においても村々へ行く労を惜しまなかった。例えば Muntakhab 1 : 290 (イスファハーンにおいて)、Muntakhab 2 : 1262; Taḥbīr 1 : 588 (ニーシャープールにおいて)、Muntakhab 3 : 1604; Taḥbīr 2 : 223 (バルフにおいて)、Ansāb 3 : 492; Ansāb (M) : f. 344 a; Muntakhab 3 : 1479 (ヘラートにおいて)、Ansāb 4 : 525; Ansāb (M) : f. 458 a (サマルカンドにおいて) 等で他地域での村落訪問事例が見うけられる。Muntakhab 2 : 963に見られるナサーでの事例では、サムアーニーがあるアーリムの住む村を訪れようとしたときに先方がそれを気の毒がって自らナサーの町まで出てきてくれたという。

1 サムアーニー研究における本稿の意義

イスラーム世界の人名録、例えばイブン・ハッリカーン (Ibn Khallikān, h. 681 年 (1282 年) 没) の *Wafayāt al-A'yān* やスブキー (al-Subkī, h. 771 年 (1369 年) 没) の *Ṭabaqāt al-Shāfi'īya al-Kubrā* などに掲載されたサムアーニーの伝記には、彼がイスラーム世界東部の各地——東はマー・ワラー・アンナフル地方から西はシリア地方、アラビア半島にまで至る——を遊学したことが必ず記されている [T. Shāfi'īya 7 : 181–182; Wafayāt 3 : 209–210]⁷⁶⁾。人名録を執筆したウラマーにとっては、このような広域にわたる遊学が彼の学識の深さを示すバロメータの 1 つだったからである。それゆえ彼を扱った従来の研究においても必然的にこの点が注目されることとなった。そしてそのような研究によって描き出されたサムアーニー像は、イブン・ジュバイル (Ibn Jubayr, h. 614 年 (1217 年) 没) に象徴されるような地域を越えて活動した旅行家的なアーリム像であった。しかし本稿で検討したとおり、彼の著作中に見える彼自身の移動記録からは、地元メルヴの村々へと積極的に足を運ぶ彼の姿も浮かび上がってくる。上記②や④や⑤の村落訪問理由に見られるように、こうした日常的な短距離移動にはメルヴ社会の一員としての名士的なアーリム像が表れているのである。

なおスルタン・サンジャル期の行政文書例文集 *'Ataba al-Kataba* に収録された一文書によれば ['Ataba : 87; Halm 1974 : 87], サムアーニーはサンジャルによって「都市メルヴとその近郊におけるシャーフィイー派のライース職 (riyāsāt-i ṭabaqāt-i Imām Muṭṭalibī Shāfi'ī (raḏīya Allāh 'an-hu) dar shahr-i Marv va navāḥi-yi ān)」や「集会モスクにおけるハティーブ職 (khiṭābat dar masjid-i jāmi')」などのさまざまな要職を任されていた⁷⁷⁾。その結果彼は「トルコ系およびペルシア系のアミール、ウラマー、シャイフなど、都市メルヴとその近郊の全ての名士たち (kāffa-yi a'yān va mu'tabirān qaṣaba-yi Marv va navāḥi-yi ān az umarā va 'ulamā va mashāyikh Turk va Tāzik)」から非常に敬意を払われ、万事において彼らから相談を受け、彼らに指示を出す立場にあったという。このように彼はメルヴでも名士中の名士であったが、そのような立場から想像されるイメージ——都市に居座って陳情を受け付けるイメージ——とは裏腹に、自らの足で村々を歩き自らの目で都市圏の様子を把握した、フットワークの軽い人物であった⁷⁸⁾。

76) 彼の伝記はこれら 2 人名録以外にも多くの文献に掲載されている。Lubāb 1 : 13–16; Siyar 20 : 456–465; Shadharāt 4 : 205–206; T. Dimashq 36 : 447–449 などを参照のこと。

77) この記述中には「彼 (サムアーニー) はマグリブ (diyār Maghrib) やシリア (bilād al-Shām) に行つて……」と記されているので、彼のライース就任は少なくとも彼の 1 回目の遊学 (h. 529 ~ 538 年 (1134–5 ~ 1143–4 年) にかけてシリアやバグダードを訪れた旅 [Nāji Salīm 1975 : 23–24]) の後のことであると推測される。この記述からはサムアーニーのような名士を利用してメルヴ都市圏における支配の安定を図ったセルジューク朝の政治姿勢を見て取れる。

78) 本稿第 II 章で見たとおり、彼は h. 555 年 (1160 年) に戦争仲裁のためシンジュ村を訪れてお

2 ウラマー研究における本稿の意義

上記5つの村落訪問理由のうち⑤に関してはサムアーニーの個人的資質や社会的立場によってもたらされた特異な事例と言えるが、他の4つ、中でも①に関しては彼に限らず多くのウラマーを村々に導いた一般的な理由であったと考えられる。例えば次の記述を見てもよい [Muntakhab 3 : 1559; Taḥbīr 2 : 196-197]。

アブー・マンスール・ムハンマド・ブン・アリー・ブン・マフムード・ブン・アブド・アッラーフ・アッタージル・アズーラヒー (Abū Maṣṣūr Muḥammad b. 'Alī b. Maḥmūd b. 'Abd Allāh al-Tājir al-Zūlahī)⁷⁹⁾。～中略～メルヴの村々の1つであるズーラーフ (Zūlah) 村の出身。～中略～彼は長寿を保った。人々は彼のもとへと旅し、ズーラーフ村は彼を求める学徒や法学者たちの〔旅の〕目的地となった (raḥala al-nās ilay-hi wa šarat qarya Zūlah maqṣad al-ṭalaba wa al-fuqahā' bi-sabab-hi)。

この記述からは、メルヴのズーラーフ村にムハンマドなる優れたハディース学者が住んでおり、彼に教を請うためにウラマーがこの村を目指して旅をしていたことがわかる⁸⁰⁾。200を越える村落があるメルヴ都市圏では、優れた学者は時としてこのように村落出身者/在住者であったから、ウラマーはそのような人物から教を得るべくたとえ遠い村であっても労を厭わず出向いていったのであった。上記①の理由によるサムアーニーの村落訪問事例もこのような一般的勉学活動の一例とみなすことができる。こういった点から考えて、少なくともメルヴ都市圏内に限って言えば、《村落→都市》方向の移動だけでなく、《都市出身ウラマーがより高度な学術環境を望んで都市へ集まっていく》という《村落→都市》方向の移動だけでなく、《都市出身のウラマーが優れた師を求めて村々へ出向いていく》という《都市→村落》方向の移動も盛んに行われていたことは明らかである。なお、都市メルヴに住むウラマーの中には、サムアーニーと同様、上記③のように墓参詣を目的として、あるいは上記④のように私領地訪問を目的とし

り、また h. 560 年 (1165 年) にも墓参詣のためクラフトハーン村を訪れており、彼がライース就任後も村々を訪れていたことはほぼ間違いない。

79) h. 524 年の終わり頃か 525 年の初め頃 (1130 年 11 月～1131 年 1 月頃) 没。彼の伝記は *Siyar* 19: 556-558 にも見られる。

80) この記述以外に、村に住むアーリムのもとに人々が集まる事例として以下の記述もある [Muntakhab 3 : 1678]。

アブー・アルファトフ・アルムフスィン・ブン・アブド・アルマリク・ブン・アルムフスィン・ブン・サイード・ブン・タルハ・アッタミーミー・アルフスラウシャーヒー (Abū al-Faṭḥ al-Muḥsin b. 'Abd al-Malik b. al-Muḥsin b. Sa'īd b. Ṭalḥa al-Tamīmī al-Khusrawshāhī)。フスラウシャーヒー^(ママ)村の人。著名なディフカーンの一人で、彼ら〔ディフカーンたち〕の顔役の一人でもある。彼の家は学者たちや優れた人々が集う場所であった (min mashāhīr al-dahāqīn wa wujūh-him wa kāna bayt-hu majma' ahl al-'ilm wa al-khayr)。

この記述に見られるディフカーンは《地主》を意味すると推測される。おそらくこのムフスィンなる人物 (h. 559 年 (1164 年) 没) はウラマーのパトロンの存在であったのだろう。

で⁸¹⁾、あるいは上記⑤のように任務を帯びて⁸²⁾村々に通う者もいたであろう⁸³⁾。このような村落訪問もまた、《都市→村落》方向の移動を活発化させる要因となっていたに違いない。

メルヴにおけるこのようなウラマーの移動は、都市と村落双方のウラマーを構成要素とする当地のウラマー社会を実質的にまとめる役割を果たしたであろう。本稿の内容からは、都市メルヴに住むウラマーと周辺村落に住むウラマーとの間の相互訪問による強い結びつき、あるいは都市と村落との違いすら感じさせない連続性、そして双方を含んだ都市圏ウラマー社会の一体性を垣間見ることができる。都市と村落との連続性や一体性はすでにラピダス (Lapidus, I. M.) によって指摘されているが [Lapidus 1969: 60-69]⁸⁴⁾、そのような点をウラマー研究と絡めて実証的に論じようとする試みはこれまで乏しかった。従来のウラマー研究では都市におけるウラマーの活動に注目が集まっており、村落に住むウラマーの情報が比較的豊富なメルヴ・ウラマーの研究は従来のものとは一線を画したウラマー像およびウラマー社会像を明らかにできる可能性を秘めているのである。しかしこの社会のより詳細な実態解明については、今後のさらなる研究を待たねばならない。

本稿で扱ったようなサムアーニーの記述は、それらが彼自身の経験に基づいた、極めて一次性の高い情報であるという点で非常に興味深い。本稿でも触れたように、メルヴを対象とした地方史文献『メルヴ史』は全て散逸し現存していない。それゆえにそれらの記述の精査こそが今後のメルヴ・ウラマー研究の進展を導いてくれる鍵なのである。

参考文献

- Ansāb: al-Sam'ānī, *al-Ansāb*, ed. 'Abd Allāh 'Umar al-Bārūdī, 5 vols., Bayrūt, 1988.
- Ansāb (M): al-Sam'ānī, *al-Ansāb*, ed. D. S. Margoliouth, Leiden & London, 1912.
- 'Ataba: Muntajab al-Dīn, *'Ataba al-Kataba*, eds. Moḥammad Qazvinī & 'Abbās Eqbāl, Tehrān, 1329 Kh.
- Ḥudūd: anon., *Ḥudūd al-'Ālam*, ed. Manūchehr Sotūde, Tehrān, 1362 Kh.
- Lubāb: Ibn al-Athīr, *al-Lubāb fī Taḥdhib al-Ansāb*, 3 vols., Bayrūt, 1980.
- Masālik: al-Iṣṭakhrī, *Masālik al-Mamālik*, ed. M. J. De Goeje (*Bibliotheca Geographorum Arabicorum* I), Leiden, 1927.
- Masālik (I. Kh.): Ibn Khurdādhbih, *al-Masālik wa al-Mamālik*, ed. M. J. De Goeje (*Bibliotheca*

81) サムアーニー以外でメルヴの村に私領地を持っていたアーリムは今のところ 1 例のみ確認できる [Ansāb 1: 458; Ansāb (M): f. 105 b]。

82) メルヴ都市圏の外からやって来たアーリムが村のカーディーとなった例もある [Muntakhab 3: 1431-1432; Taḥbīr 2: 115]。

83) また都市メルヴから村へと移住したアーリムの例も見られる。本稿第 II 章第 3 節の 2 番目の引用を参照。

84) このような連続性や一体性はイラン都市の特徴とみなされている [羽田 1991: 226]。

- Geographorum Arabicorum VI*), Leiden, 1889.
- Mu'jam : Yāqūt al-Ḥamawī, *Mu'jam al-Buldān*, ed. Farīd 'Abd al-'Azīz al-Jundī, 7 vols., Bayrūt, 1990.
- Muntakhab : al-Sam'ānī, *al-Muntakhab min Mu'jam Shuyūkh*, ed. Muwaffaq b. 'Abd Allāh b. 'Abd al-Qādir, 4 vols., al-Riyāḍ, 1996.
- Shadharāt : Ibn al-'Imād, *Shadharāt al-Dhahab fī Akhbār man dhahab*, 8 vols., Bayrūt, 1979.
- Siyar : al-Dhahabī, *Siyar A'lām al-Nubalā'*, 25 vols., Bayrūt, 1982 – 88.
- Şūra : Ibn Ḥawqal, *Şūra al-Arḍ*, ed. J. H. Kramers (*Bibliotheca Geographorum Arabicorum II*), Leiden, 1939.
- Taḥbīr : al-Sam'ānī, *al-Taḥbīr fī al-Mu'jam al-Kabīr*, ed. Munīra Nāji Sālim, 2 vols., Baghdād, 1975.
- Taqāsīm : al-Muqaddasī, *Aḥsan al-Taqāsīm fī Ma'rifa al-Aqālīm*, ed. M. J. De Goeje (*Bibliotheca Geographorum Arabicorum III*), Leiden, 1906.
- T. Dimashq : Ibn 'Asākīr, *Ta'rīkh Madīna Dimashq*, ed. 'Umar b. Gharāma al-'Amrawī & 'Alī Shīrī, 80 vols., Bayrūt, 1995 – 2001.
- Ṭ. Shāfi'īya : al-Subkī, *Ṭabaqāt al-Shāfi'īya al-Kubrā*, ed. Maḥmūd Muḥammad al-Ṭanāḥī & 'Abd al-Fattāḥ Muḥammad al-Ḥilw, 10 vols., al-Qāhira, 1964.
- Wafayāt : Ibn Khallikān, *Wafayāt al-A'yān wa Anbā' Abnā' al-Zamān*, ed. Iḥsān 'Abbās, 8 vols., Bayrūt, 1977.
- Bartold, V. V. (1966) K istorii Merva. *Sochineniia* 4. Moskva, 172 – 195.
- Barthold, W. (Soucek, Svat (tr.)) (1984) *An Historical Geography of Iran*. Princeton.
- Belenitskiĭ, A. M., Bentovich, I. B. & Bol'shakov, O. G. (eds.) (1973) *Srednevekovyi Gorod Sredneĭ Azii*. Leningrad.
- Bosworth, C. E. (1968) The Political and Dynastic History of the Iranian World (A. D. 1000 – 1217). In : Boyle, J. A. (ed.), *The Cambridge History of Iran* 5. Cambridge, 1 – 202.
- Brockelmann, C. (1937 – 49) *Geschichte der Arabischen Litteratur*. 5 vols., Leiden.
- Brunschvig, R. (1960) BARĀ'A. *EP*.
- Bulliet, R. W. (1970) A Quantitative Approach to Medieval Muslim Biographical Dictionary. *JESHO* 13, 195 – 211.
- Bulliet, R. W. (1972) *The Patricians of Nishapur*. Cambridge.
- Farīdanī, Āzarmīdokht Mashāyekh (ed.) (1992 a) *Majalle-ye Tahqīqāt-e Ta'rīkhī ('Elmī va Pazhūheshī)* 6 – 7 (Marv-nāme). Tehrān.
- Farīdanī, Āzarmīdokht Mashāyekh (1992 b) Marv dar 'Ahd-e Banī Omayye. In : Farīdanī 1992 a, 155 – 194.
- Farīdanī, Āzarmīdokht Mashāyekh & Valī, Vahhāb (1992) Marv dar Doure-ye Kholafā-ye Rāshedīn. In : Farīdanī 1992 a, 133 – 154.

- al-Hadithi, Qaḥṭān 'Abd al-Sattār (1990) *Arbā' Khurāsān*. al-Bašra.
- Halm, H. (1974) *Die Ausbreitung der šāfi'itischen Rechtsschule von den Anfängen bis zum 8. / 14. Jahrhundert*. Wiesbaden.
- 羽田 正 (1991) イラン 羽田正・三浦徹 (編) 『イスラム都市研究 [歴史と展望]』東京大学出版会, 217-263.
- Herrmann, G. (1999) *Monuments of Merv: Traditional Buildings of the Karakum*. London.
- Homāyūn, Nāṣer Takmil (1992) Negāhī be Marv az Ḥamle-ye Moghūl tā Pāyān-e Doulat-e Nāderī. In: Faridani 1992 a, 225-242.
- Kamaliddinov, Sh. S. (1993) "KITAB AL-ANSAB" *Abu Sa'da Abdalkarima ibn Mukhammad as-Sam'ani kak istochnik po istorii kul'tury Srednei Azii*. Tashkent.
- 加藤 博 (2003) ターシルとウラマー 佐藤次高 (編) 『キーワードで読むイスラーム』(アジア理解講座2) 山川出版社, 115-135.
- Kennedy, H. (1999) Medieval Merv: An Historical Overview. In: Herrmann 1999, 25-44.
- 私市正年 (1986) 法の担い手たち 佐藤次高 (編) 『イスラーム・社会のシステム』(講座イスラーム3) 筑摩書房, 41-77.
- Köymen, M. A. (1991) *Büyük Selçuklu İmparatorluğu Tarihi 5: İkinci İmparatorluk Devri* (3rd ed.). Ankara.
- ラムトン, A. K. S. (岡崎正孝訳) (1976) 『ペルシアの地主と農民』岩波書店.
- Lapidus, I. M. (1969) Muslim Cities and Islamic Societies. In: Lapidus, I. M. (ed.), *Middle Eastern Cities*. Berkeley & Los Angeles, 47-79.
- Le Strange, G. (1930) *The Lands of Eastern Caliphate*. Cambridge.
- マッソン, V. (加藤九祚訳) (1970) 『埋もれたシルクロード』岩波新書.
- 三浦 徹 (1995) ウラマー 三浦徹ほか (編) 『講座イスラーム世界別巻 イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所, 249-255.
- Meftāḥ, Elhāme (1992) Joghṛāfiyā-ye Ta'rikhī-ye Morghāb. In: Faridani 1992 a, 71-132.
- Muwaffaq b. 'AbdAllāh b. 'Abd al-Qādir (1996) al-Ta'rif bi-al-Imām al-Ḥāfiẓ Abī Sa'd 'Abd al-Karīm b. Muḥammad b. Maṣṣūr al-Sam'ānī al-Tamīmī al-Mutawaffā Sana 562 h.. In: Muntakhab 1, 21-105.
- 森本一夫 (2006) イブン・フドゥク —— 12世紀東イランのある博学者の肖像 —— 『アジア遊学』86, 45-56.
- 森山央朗 (2004) イスラーム的知識の定着とその流通の変遷 —— 10-12世紀のニースシャーポールを中心に —— 『史学雑誌』113-8, 1-33.
- 森山央朗 (2007) 知識を求める移動 —— ハディース学者の旅の重要性の論理 —— メトロポリタン史学会 (編) 『歴史のなかの移動とネットワーク』(メトロポリタン史学叢書1) 桜井書店, 83-115.
- Nāji Sālim, Munīra (1975) Muqaddima. In: Taḥbīr 1, 19-68.
- 西村淳一 (2003) アブド・アッラーフ・ブン・ブライダ —— ウマイヤ朝期ホラーサーン地方の一

- タービットとその一族について——『西南アジア研究』58, 32-56.
- 西村淳一 (2005) サムアーニー著 *Kitāb al-Ansāb* 中に見える地名ニスバについて『史淵』142, 135-179.
- 大稔哲也 (1999) イスラーム世界の参詣——聖者とスーフィズムを視野に入れつつ——樺山紘一ほか編『イスラーム世界の発展』(岩波講座 世界歴史10) 岩波書店, 149-180.
- Petry, C. F. (1985) Travel Patterns of Medieval Notables in the Near East. *SI* 62, 53-87.
- Rādfar, Abū al-Qāsem (1372 Kh.) *Olamā-ye Marv*. In: Mehrābi, Mas'ūd (ed.), *Yād Yār ... Majmū'e-ye Maqālāt darbāre-ye Āsiyā-ye Markazī*. Tehrān, 125-146.
- Ranjbar, A. (1343 Kh.) *Khorāsān-e Bozorg*. Tehrān.
- Robson, J. (1960) *AL-BUKHĀRĪ. EP*.
- 佐藤明美 (1994) 初期イスラーム時代のメルヴ『イスラーム世界』43, 27-53.
- 清水宏祐 (1990) イラン史の中の都市像——10～11世紀ニーシャープール——『史潮』新26, 26-39.
- Sellheim, R. (1995) *AL-SAM'ĀNĪ. EP*.
- Shaban, M. A. (1970) *The 'Abbāsīd Revolution*. Cambridge.
- Vali, Vahhāb (1992) *Marv dar Doure-ye Saljūqiyān*. In: Farīdanī 1992 a, 195-224.
- Volin, S. (tr.) (1939) *Iz vlechenie iz Kitab al-Ansab Abu-Sa'da as-Sam'ani, po Faksimile (GMS, XX) i Rukopisi IV AN S 361. Materialy po Istorii Turkmen i Turkmenii 1*. Moskva & Leningrad, 325-343.
- Williams, T. (2007) The City of Sultan Kala, Merv, Turkmenistan: Communities, neighbourhoods and urban planning from the eighth to the thirteenth century. In: Bennison, A. K. & Gascoigne, A. L. (eds.), *Cities in the Pre-modern Islamic World: The urban impact of religion, state and society*. London & New York, 42-62.
- ライト, W. (後藤三男訳) (1987) 『アラビア語文典』全2巻, 後藤書房.
- Yakubovskii, A. Yu. & Bosworth, C. E. (1991) *MARW AL-SHĀHIDJĀN. EP*.
- 湯川 武 (1979) 中世イスラーム世界におけるウラマーの移動性——エジプトにおける西方イスラーム世界出身のウラマーの活動——『オリエント』22 (2), 57-74.
- 湯川 武 (1990) ウラマーの遊学の世界 板垣雄三編『歴史のなかの地域』(シリーズ世界史への問い8) 岩波書店.
- 湯川 武 (1992) 都市とウラマー・総論 板垣雄三・後藤明 (編)『事典 イスラームの都市性』亜紀書房, 261-264.
- al-Zirikli, Khayr al-Dīn (1996) *al-A'lām: Qāmūs Tarājīm* (10th ed.). 8 vols., Bayrūt.
- Zhukovskii, V. A. (1894) *Razvaliny Starogo Merva*. Sankt-Peterburg.

表1 Ansāb と Mu'jam に収録されているメルヴの周辺村落

No.	名 前	Ansāb	Ansāb (M)	Mu'jam
1	Ālīn	1 : 65 5 : 153	f. 15 a f. 498 a	1 : 75 5 : 34
2	Ibrīnaq	1 : 73	f. 16 b	1 : 93
3	Arzanqābādh	—	—	1 : 180
4	Arsāband	1 : 111	f. 25 b	1 : 181
5	Arwā	1 : 117	f. 27 a	1 : 196
6	Iśfas	1 : 146	f. 34 a	1 : 213
7	Ushṭākhwast	1 : 162	f. 38 a	1 : 232
8	Ushṭurj	1 : 162	f. 38 a	1 : 232
9	Ifshīrqān	1 : 198	f. 46 b	1 : 275
10	Andāq	1 : 215	f. 50 a	1 : 308
11	Andarāba	1 : 216	f. 50 a	1 : 309
12	Andaghn	1 : 216	f. 50 b	1 : 310
13	Anqulqān	1 : 222	f. 52 a	1 : 323
14	Bābshīr	1 : 241	f. 55 b	1 : 366
15	Bābaqarān	1 : 242	f. 56 a	1 : 366
16	Bājkhūst	1 : 245	f. 56 b	1 : 371
17	Bārān	1 : 251	f. 58 a	1 : 379
18	Bāz	1 : 257	f. 59 b	1 : 382 4 : 260
19	Bāgh	1 : 263	f. 61 a	1 : 387
20	Bāghnābādh	—	—	1 : 387
21	Bālaqān	1 : 269	f. 62 b	1 : 391
22	Bālā	1 : 276	f. 64 b	1 : 390
23	Bahīrābādh	—	—	1 : 416
24	Bakhjarmān*	1 : 294	f. 68 a	1 : 423
25	Badhis	1 : 302	f. 70 a	1 : 431
26	Barzan	1 : 319	f. 73 b	1 : 454
27	Burz	1 : 320	f. 74 a	1 : 454
28	Bursānjird	1 : 321	f. 74 a	1 : 456
29	Barwanjird	1 : 333	f. 77 a	1 : 481
30	Buzmāqān	1 : 342	f. 79 a	1 : 478 1 : 488
31	Buznān	1 : 342	f. 79 a	1 : 488
32	Basīna	1 : 355	f. 82 a	1 : 503
33	Bushān	1 : 356	f. 82 a	1 : 504
34	Bashba*	1 : 356	f. 82 a	1 : 504
35	Bushwādhaq	1 : 362	f. 83 b	1 : 509
36	Bakird	1 : 385	f. 88 b	1 : 562
37	Balāshjird	—	—	1 : 564
38	Baljān*	1 : 387	f. 89 a	1 : 568
39	Balkiyān	1 : 393	f. 90 b	1 : 580
40	Bamlān	1 : 398	f. 91 b	1 : 587
41	Bunān	1 : 399	f. 91 b	1 : 589
42	Bundukān*	1 : 402	f. 92 a	1 : 592
43	Bansāraqān	1 : 404	f. 92 b	1 : 593
44	Banīrqān	1 : 405	f. 93 a	1 : 595
45	al-Būtaq	1 : 408	f. 93 b	1 : 600
46	Būzanjird	1 : 412	f. 94 b	1 : 601
47	Būzanshāh*	1 : 413	f. 95 a	1 : 601
48	Būyanah	1 : 417	f. 96 a	1 : 609
49	Bahār	1 : 419	f. 96 a	1 : 609
50	Baysān	—	—	1 : 626
51	Bimān	1 : 437	f. 100 b	1 : 634
52	Turkān*	1 : 458	f. 105 b	2 : 27
53	Tiliyān	1 : 475	f. 108 b	2 : 53
54	Tūth*	1 : 489	f. 111 b	2 : 65
55	Tirkān	1 : 496	—	2 : 76
56	Jāwarsa	2 : 13	f. 120 a	2 : 112
57	Jurābādh	2 : 36	f. 125 a	2 : 135
58	Jurjusār	2 : 43	f. 127 a	2 : 143
59	Jurmihan	2 : 47	f. 127 b	2 : 151
60	Jarirā	2 : 51	f. 128 b	2 : 153
61	Julakhtujān	2 : 73 5 : 87	f. 132 b f. 486 a	2 : 175 4 : 541
62	Julfar	2 : 74	f. 132 b	2 : 179
63	Jundafarqān	2 : 94	f. 137 a	2 : 197
64	Junūjird	2 : 98	f. 137 b	2 : 200
65	Jūbār*	2 : 106	f. 139 b	2 : 205 2 : 222
66	Jūbān	2 : 108	f. 140 a	2 : 205 4 : 552
67	Jiyāsar	2 : 139	f. 146 b	2 : 226
68	Jikhan	2 : 140	f. 146 b	2 : 229
69	Jiramazdān	2 : 142	f. 147 a	2 : 230
70	Jiranj*	2 : 142	f. 147 a	2 : 231
71	Jishabur	2 : 145	f. 148 a	2 : 233
72	Ḥafṣābādh	2 : 238	f. 171 b	2 : 318
73	Khālidabādh	2 : 310	f. 186 a	—
74	Khabāq*	2 : 317	f. 187 b	2 : 392
75	Khartaṭ	2 : 346	f. 194 a	2 : 411
76	Kharaq*	2 : 349	f. 195 a	2 : 412
77	Khusrābādh	—	—	2 : 423
78	Khusrawshāh	2 : 364	f. 199 a	2 : 424
79	Khimqābādh*	2 : 398	f. 207 a	2 : 444
80	Khawajjān	2 : 413	—	2 : 457
81	Dārakān	2 : 439	f. 217 b	2 : 482
82	Dubzan	2 : 453	f. 221 b	2 : 498
83	Durbīqān	2 : 467	f. 224 b	2 : 511
84	Darsinān	2 : 470	f. 225 a	2 : 513
85	Darwāzaq	2 : 471	f. 225 b	2 : 515
86	Darijaq	2 : 472	f. 225 b	2 : 517
87	al-Dīzaq	2 : 475	f. 226 a	2 : 517
88	Dastijird	2 : 476	f. 226 a	2 : 518
89	Dalghātān	2 : 488	f. 228 a	2 : 524
90	al-Dandānqān	2 : 497	f. 230 a	2 : 543
91	Dīshān	—	—	2 : 614
92	al-Dīnabādh	—	—	2 : 616
93	Dīnah Mazdān	2 : 530	f. 238 a	2 : 616
94	Rāmāshāh	—	—	3 : 18
95	Rakhān	3 : 52	f. 250 a	3 : 43
96	al-Razīq	3 : 60	f. 252 a	3 : 48
97	Rikanz	3 : 115 4 : 130	f. 265 a f. 380 a	3 : 129 4 : 87
98	Rīwqān	3 : 116	f. 265 b	3 : 131
99	Zāriyān	3 : 120	f. 266 b	3 : 141
100	Zabūya	3 : 134	f. 270 a	3 : 147
101	Zarazm	3 : 145	f. 273 a	3 : 153
102	Zarq	3 : 146	f. 273 b	3 : 154
103	Zaghandān*	3 : 157	f. 276 a	3 : 162
104	Zumluq	3 : 164	f. 277 b	3 : 168
105	Zandān	—	—	3 : 172
106	Zūlāh	3 : 178	f. 281 b	3 : 178
107	Sāsa jird*	3 : 197	f. 285 b	3 : 193
108	Sānqān	3 : 205 3 : 513	f. 287 b f. 348 a	3 : 201 3 : 443
109	Sānuwājird	3 : 205	f. 287 b	3 : 201
110	Sadiwar*	3 : 238	f. 294 b	3 : 228
111	Sirw	—	—	3 : 246
112	Saqīdunj	—	—	3 : 258
113	Sukandān	3 : 269	f. 301 a	3 : 261

114	Salmānān	3 : 276	f. 302 b	3 : 271	155	Falānān	—	—	4 : 307
115	Bāb Sanjān	3 : 314	f. 312 b	3 : 299	156	Funjukān	4 : 402	f. 432 a	4 : 314
116	Sinj*	3 : 317	f. 313 a	3 : 299	157	Fundīn*	4 : 403	f. 432 a	4 : 315
117	Sawsaqān	3 : 334	f. 317 a	3 : 320 3 : 358	158	Fanīn	4 : 404	f. 432 b	4 : 316
118	Siqadhanj	3 : 361	f. 322 b	3 : 339	159	Firūzābādh	4 : 417	f. 435 b	4 : 321
119	Snān*	3 : 365	f. 323 b	3 : 340	160	Fimān	—	—	4 : 325
120	Shābāy	—	—	3 : 344	161	Qarīnayn	4 : 487	f. 450 a	4 : 384
121	Shābarābādh	3 : 368	f. 324 a	3 : 344	162	Kāza	5 : 14	f. 471 a	4 : 487
122	Shābrinj	3 : 369	f. 324 a	3 : 344	163	Kālakhsān	—	—	4 : 490
123	Shābūrtazah	3 : 369	f. 324 a	3 : 345	164	Kushmīhan*	5 : 75	f. 484 a	4 : 526
124	Shāfsaq	3 : 382	f. 326 a	3 : 344	165	Kulḫabāqān	5 : 87	f. 486 a	2 : 175 4 : 540
125	Shāwān*	3 : 391	f. 328 a	3 : 358	166	Kamsān*	5 : 94	f. 487 a	4 : 544
126	Shāwshābādh	3 : 391	—	3 : 358	167	Kanjukān	5 : 101	f. 488 a	4 : 547
127	Shīqq	3 : 447	f. 337 a	—	168	Kulāshkird	5 : 117	f. 491 b	4 : 539
128	Shakalān	3 : 449	f. 337 b	3 : 405	169	Lākumālān*	5 : 668	f. 595 a	5 : 8
129	Shamīrān	3 : 457	f. 338 b	3 : 414	170	Mābīrsām	5 : 154	f. 498 a	5 : 38
130	Shamīhan	3 : 459	f. 338 b	3 : 415	171	Māḫuwān	5 : 158	f. 499 a	5 : 39
131	Shawwāl	3 : 466	f. 340 a	3 : 420	172	Māsti	—	—	5 : 49
132	Shahmīl	—	—	3 : 429	173	Mālān	—	—	5 : 51
133	Shij	3 : 487	f. 343 a	3 : 438	174	Māhiyān	5 : 183	f. 504 b	5 : 59
134	Shīrnakhshir	3 : 498	f. 345 a	2 : 231 3 : 434	175	Murīn	5 : 268	f. 525 a	5 : 139
135	Šāghān	3 : 508	f. 347 a	3 : 441	176	Masūs	5 : 299	f. 530 b	5 : 152
136	Šakhrābādh	3 : 525	f. 350 a	3 : 448	177	Ma'marān	5 : 345	f. 536 b	5 : 184
137	Takhsh	4 : 54	f. 368 b	4 : 26	178	Mughnān	5 : 354	—	5 : 189
138	Tūsān	4 : 79	f. 372 b	4 : 55	179	Muljukān	5 : 380	f. 541 b	5 : 220
139	Taysafūn	4 : 96	f. 376 a	4 : 63	180	Mīhrabānān	—	—	5 : 269
140	Sinj al-'Abbādi	4 : 123	f. 379 b	4 : 84	181	Mīhrabandaqshā'i	5 : 413	f. 545 b	5 : 269
141	Gharq	4 : 287 4 : 290	f. 407 a f. 408 a	4 : 220 4 : 228	182	Mīhrijān	5 : 416	f. 546 a	5 : 271
142	Ghulṭān	4 : 307	f. 410 b	4 : 236	183	Mīrmāhān	5 : 431	f. 548 a	5 : 280
143	Ghūriyān	—	—	4 : 247	184	Mīlāqān	5 : 439	f. 550 a	—
144	Ghūlqān	4 : 320	—	4 : 249	185	Nāranābādh	5 : 443	f. 550 b	5 : 291
145	Fāshān	4 : 338	f. 417 a	4 : 262	186	Nāfqān	5 : 447	f. 551 b	5 : 294
146	Farāghān	—	—	4 : 277	187	Nashk	5 : 490	f. 560 b	5 : 330
147	Furāhīnān*	4 : 357	f. 421 b	4 : 279	188	Namakabān	5 : 527	f. 569 a	5 : 352
148	Fursābādh	4 : 364	f. 423 a	4 : 283	189	Naws*	5 : 534	f. 571 a	5 : 359
149	Farnabādh	4 : 371	f. 425 a	4 : 291	190	Wāhkān	5 : 569	f. 578 a	—
150	Farwājān	4 : 373	f. 425 b	4 : 292	191	Hurmuzghand	5 : 634	f. 589 a	5 : 463
151	Farhādhjird	4 : 375	f. 426 a	4 : 293	192	Hurmuzfarah*	5 : 635	f. 589 a	5 : 148 5 : 463
152	Firyānān*	4 : 377	f. 426 b	4 : 294	193	Haftajird	—	—	5 : 469
153	Fustuqān	—	—	4 : 297	194	Hafarfar	—	—	5 : 469
154	Falākird	—	—	4 : 307	195	Hūrqān	5 : 656	f. 593 a	5 : 482

- ここで言う「メルヴの村落」とは、両史料中に「メルヴの村々に含まれる村 (qarya min qurā Marw)」あるいは「メルヴにある村 (qarya bi-Marw)」のように記されているものである。
- なお本稿第 I 章第 2 節で述べたとおり、Ansāb 中で 2 つ (al-Dandānqān, Qarīnayn), Mu'jam 中で 3 つ (Fāz, Jiranj, al-Dandānqān) が都市と定義されている。
- 表中の村落の順序は、Ansāb 中での登場順に一致させた (ただし 169 Lākumālān を除く)。基本的にはアラビア文字のアリフ・バー順に並んでいる (ただし 115 Bāb Sanjān, 140 Sinj al-'Abbādi を除く)。なお hā' を頭文字とするものは、現代のアリフ・バー順と異なり、wāw を頭文字とするものの後ろに位置する。
- 名前の後に * 印が付いている場合はサムアーニー自身がそこを訪れたことを表している。

表2 都市メルヴと周辺村落との距離関係

都市メルヴからの距離	都市メルヴ周辺の村落
1 farsakh (≒ 6 km)	Bāb Sanjān, Bābshīr, Balkiyān, Bamlān, Dārakān, Darwāzaq, Darijaq, Zāriyān, Shāwshābādh, Shakalān, Farwājān, Mirmāhān
2 farsakh (≒ 12 km)	Arsāband, Arwā, Andāq, Bāgh, Basīna, Bansāraqān, Būyanah, Julfar, Khusrābādh, Khusrawshāh, al-Dīnabādh, Dinah Mazdān, Rikanz, Zabūya, Shāfsaq, Shīqq, Shamīhan, Ṭakhsh, Ṭūsān, Ṭaysafūn, Fursābādh, Farhādhjird, Funjukān, Kulāshkird, Murin, Muljukān
3 farsakh (≒ 18 km)	Ushṭākhwast, Bursānjird, Bakird, Jāwarsa, Kharaq, Rīwqān, Zūlāh, Salmānān, Siqadhanj, Shābrinj, Shawwāl, Shīrnakhshīr, Gharq, Fāshān, Fanīn, Firūzābādh, Mākhuwān, Māhiyān, Mihrabandaqshā'i, Naws Kāranjān
4 farsakh (≒ 24 km)	Bājkhūst, Balāshjird, Būzanshāh, Jarirā, Jikhan, Darsinān, Dalghāṭān, Sāsajird, Sawsaqān, Ghulṭān, Fāshān, Furāhīnān, Mābirsām,
5 farsakh (≒ 30 km)	Ifshīrqān, Andaghn, Badhis, Burz, Bashba, Bushwādhāq, Baljān, Bundukān, al-Būtaq, Tūth, Julakhtujān, Junūjird, Dubzan, Durbiqān, Sānqān, Sānuwājird, Sukandān, Sinān, Shābarābādh, Shij, Ghūlqān, Farnābādh, Fundīn, Kāza, Kushmīhan, Kamsān, Lākumālān, Nashk, Hurmuzghand, Hurmuzfarah
6 farsakh (≒ 36 km)	Khabāq, Kharṭaṭ, Rakhān, Zarazm, Zarq, Zaghandān, Shāwān, Nāfqān,
7 farsakh (≒ 42 km)	Isfas, Bāz (Fāz), Rāmāshāh, Zumluq, Sinj, Masūs, Milāqān, Namakabān, Hūrḡān,
8 farsakh (≒ 48 km) 以上	8 f. : Shamīrān / 10 f. : Jīranj, al-Dandānqān / 15 f. : Qarinayn

- この表は Ansāb と Mu'jam の情報 (表1を参照) を基に作成されたものである。2史料の情報に差異がある場合は Ansāb の情報を優先させた。
- Farhādhjird (2 f.) に関しては史料中では「数 f.」と記されており正確な距離は不明であるが、ここでは便宜的に 2 f. とした。
- Bāb Sanjān (1 f.), Mirmāhān (1 f.), al-Dīnabādh (2 f.), Dinah Mazdān (2 f.), Rīwqān (3 f.), Naws Kāranjān (3 f.), Baljān (5 f.), al-Būtaq (5 f.), Kāza (5 f.), Isfas (7 f.), Rāmāshāh (7 f.), Zumluq (7 f.), Milāqān (7 f.), Namakabān (7 f.) に関しては2史料とも距離を示していないが、史料中の記述をもとに推定した。Fāshān (4 f.), Hurmuzfarah (5 f.) についても2史料とも距離を示していないが、Masālik (I. Kh.): 25 および Masālik : 284 の情報に基づいた。
- Jīranj (10 f.) は、Masālik : 284 では6 f. と記されているが、ここでは Mu'jam の情報に従った。同様に Qarinayn も、Masālik (I.Kh.): 32 では25 f. と記されているが、ここでは Mu'jam の情報に従った。